遠江・山と里の民俗

会報　第016号

例年にないマスクを付けての禰宜の舞：川名ひよんどりにて

コロナ退散を祈る祭の波

浜松市無形民俗文化財保護団体
連絡会会長　前嶋　功

コロナ禍の中で、早くから祭をどうするかを各保存会で検討していると聞いていました。私の所へも連絡会としてどのような方針でいるかという問い合わせが寄せられました。それぞれの地域の情況や祭の中身が違うので、統一見解は出せませんでした。

私はこれまで市内の伝統ある祭りをたくさん見せていただく中で、何百年にもわたって絶えることなく続いた姿を目の当たりにしてきました。その歩みの中で戦乱や飢饉にあってもその灯は絶やしたことがなかったのです。疫病によって村の半数以上が死に絶えて、村の存続さえおぼつかない時でさえも神仏への祈りは絶やしたことはなかったことも知りました。

コロナ禍も第二波が去り、一安心したのも束の間、流行はぶり返し、各地の祭りの中止の報道が増えてきました。私は、疫病の原因も防除も全く分からない昔の人々が、祭の灯を絶やさなかったことに思いを馳せ、何としても祭を続ける決意を持ち続けてきました。

川名のひよんどりでは

私たちの「川名ひよんどり」では一通りの祭事は行うことができました。

朝から祢宜衆は祭に使う「お鍬様・柳箸」を、堂守衆は大しめ縄をいつものように作り、仏前に奉納しました。

「シシ打ち・祢宜の舞・歌読み・伽藍様の祭」と一通りの祭事を行いました。密になる若者による水垢離、呼び物の「タイとぼし」等は中止することになりました。

いつもは大勢の観客に取り囲まれる中で、周りの目を意識した祭事に対して、今年は何も気にすることなく、神仏に対峙する本来の祭に立ち返ったひと時であったようにも思えてきました。

神澤おくないでは

清竜中学校の生徒によって演じられていた神澤おくないはコロナ禍によって参加出来なくなり、早くから実施が危ぶまれていました。

継承同好会代表の石野重利さんも灯を絶やすことを懸念していました。今回賛同してくれるＮＰＯ法人が見つかり、早くから練習に取り組むことができ「神歌・順の舞・万歳楽・矛の舞」を阿弥陀堂で実施することができました。

さらに、２月11日にはクリエート浜松で「次世代育成三遠南信民俗芸能公演」にも同じメンバーで出演して、広報することができました。

コロナ禍での対応が、市民参加の貴重な民俗芸能を継承する端緒をつけた先例となりました。

他の保護団体連絡会では

他の地域でも人が集まる芸能部分を中止して神事のみにした所や、村人だけで何ら変わることなく祭が進められた所もありました。コロナ終息の折には一般の人々も受け入れ再開するようです。

そこに暮らすことの尊さ
―北遠での民話探訪から―

静岡文化芸術大学教授
二本松　康宏

大学のゼミの学生たちとともに北遠で民話の採録を始めてから七年になる。水窪で三年、龍山で一年、二〇一八年からは春野を訪ね歩いている。伝説や昔話は地域と家庭に語り継がれた形のない文化財である。私たちはそれを「心と記憶の文化遺産」と呼んでいる。

二本松康宏監修、亀本梨央・川口璃穏・柴田俊輔編著、三弥井書店発行、二〇二〇年三月

＊　＊

春野町の犬居地区には「つなん曳」と呼ばれる祭礼が伝えられている（浜松市指定無形民俗文化財）。端午の節句にあたる五月五日、気田川の河原で柳や竹、葦などを束ねて巨大な蛇体が作られる。一説には龍であるともいう。蛇体は龍勢社の青年たちに担がれて街道（すみれ通り）を引きまわされ、最後には犬居橋の上から気田川に投げ入れられる。

犬居つなん曳　　写真提供/上嶋裕志氏

その「つなん曳」の由来については、次のような伝説が伝えられている。

＊　＊

それはね、犬居でさ、そこに橋があるら。橋の向こっかで、毎年水害に遭うだ。大水が出て、その堤防を切って、田畑を荒らされるって言うで、そうゆう洪水があったけど。ある年に、その大蛇、大雨を降らして空から降りてきて。

ほいで犬居へ、この橋の向こうの集落の堤防に、大蛇が、こう、二匹。ほいで洪水を防いだって。

（『春野の昔話と伝説』より）

＊　＊

ところで、この伝説には少し気になるところがある。

一つには、身を挺して集落を救ってくれた大蛇を担いで練り歩くのはわかるとして、しかし、その大蛇をどうして気田川に放り投げて流すのか。川に流すのはたいていケガレや災厄である。ケガレや災厄を人形や作り物に移して流す行事は全国に伝えられている。

もう一つは、「その大蛇、大雨を降らして空から降りてきて」という部分である。もともと龍蛇は雨を司る存在である。空から降りてきた二匹の大蛇こそ、実は大雨を降らせた張本人だったのではないか。

だとすれば、「つなん曳」は、本来、気田川を荒らして犬居に洪水をもたらす（と信じられていた）大蛇を祀り、その荒ぶる魂を鎮め、ケガレや災厄のごとく気田川へ流す鎮魂の祭礼だったのではないか。

犬居城址から俯瞰した犬居地区　撮影/川口璃穏さん

＊　＊

こうした話を「災害伝承」という。現在、私のゼミでは北遠の災害伝承を収集し、それらの解析にあたっている。たとえば春野の新宮池や龍山の池之田などに伝わる大蛇の伝説は、「蛇抜（じゃぬ）け」と呼ばれる地すべりの記憶を示唆していると考えられる。水窪の上村に伝わる「蛇聟（へびむこ）入り」もおそらく同じだろう。歴史資料には記されていない、いわば「心と記憶の災害予測図（ハザードマップ）」である。

「あなた方が暮らす土地は昔から災害が起きやすい」などと言われたら、きっと不快に思われる方が多いだろう。だが、私たちが解き明かしたいのはけっしてそこではない。

たとえば、気田川の氾濫によって、犬居には有機質やミネラルを含んだ豊かな水田が広がっていた。北遠でも屈指の肥沃の地である。かつて犬居の人々は気田川の氾濫と向き合いながら、その豊かさを享受してきた。「つなん曳」はその誇りを象徴するものであろう。あるいは水災に打ち勝ったときの記念だったかもしれない。

私たちが伝説や昔話を訪ね歩くのは、そこに暮らす人々の誇りと尊さに出会いたいからである。災害伝承は、実は地域の誇りの記憶でもある。

遠州おこないの世界
調査・研究から見えてきたもの

宮嶋隆輔（成城寺小屋講座）

11月22日、遠州のおこない系祭祀（おくない・ひよんどり・田楽）の調査・研究プロジェクトの「中間報告会」が開催された。

主な成果の一つは、川名地区の方々の多大なご協力のもと調査を実施、冊子『川名のひよんどり―遠江・正月の祭祀と芸能』を制作できたことだ。ひよんどりの祭りを記録し、その豊かな世界について考察することができた。

二つ目は、寺野地区の古文書調査・翻刻および解読。禰宜の方が所有する古文書19点と、西田かほる先生発見の古文書15点、合計34点の古文書を翻刻した。中には新発見の芸能詞章や、祈禱の記録もあり、極めて貴重である。

■おこないの〈言葉〉の世界

遠州おこないの調査・研究を通じて得られるものは大きい。例えばおこないで歌われる神歌。そこには平安～室町時代に流行した中世歌謡が多く見られる。毎年同じ文句を口伝で残してきた確かな伝承が感じられる。

「翁」「松かげ」といった仮面をつけての語り芸も貴重だ。鎌倉時代に成立した「翁」は、能・狂言の前身となった猿楽の芸能。能楽の各流派が伝える「翁」と、おこないの「翁」を比較・分析すると、実はおこないの「翁」が古い形式を残していることが分かる。これによって「能」以前の翁芸のすがたを復元させることができる（拙稿「翁語りのドラマツルギー」）。遠州おこないには、実は日本列島全体の芸能の歴史を知るうえでも重要なエッセンスが伝わっているといえよう。

さらに今回の調査で新たに発見された詞章にも驚かされた。寺野地区の「八幡大菩薩祭礼ひき目のひぼとき」は、弓矢の名手・八幡太郎が東西南北に出現した「六つの月日」を射落とし、太陽と月をひとつずつにして日本を救い、そののち祝宴をするという壮大なストーリーを持つ。自然災害などの災いが鎮まることを祈った芸能といえる。川名のシシウチと同じ文言が見えるなど、各地の神事との深い繋がりも感じられ興味深い。また寺野では新たに「万歳」詞章も発見された。尾張・知多万歳との共通点を持ちながら、寺野本にしかない詞章を含む貴重な資料である。

■仮面や作法をめぐる〈信仰〉

遠州のおこないにはユニークな造形の民俗仮面が多く伝わり、祭りで使われていない面も含めるとその数は膨大である。

三ヶ日・大福寺旧蔵の鎌倉末期の父尉面（翁面）など、非常に古い仮面もあり、遠州には早くから芸能文化が根付いていたことが知られる。能面の名品も多く、雄踏町・息神社の尉面は特に有名だ。

仮面という「有形」の文化財だけでなく、面にまつわる「無形」のしきたりや信仰もまた重要だ。例えば祭りの開始にあたり面を清め祓い、棚や面箱に飾る作法がある。仮面は神様にも近い神聖なものとして信仰されている。

おこないでは、特に儀式的な演目で、仮面をあえて「額」に乗せて演じることがある。延宝三年（一六七五）の懐山の資料にもそのことが見え、古くからの作法らしい。

神沢おくないの「鉾の舞」でも、面をやはり頭上につけて舞台を踏み鳴らす。さらに面を外して手に持ち、高く掲げながら足踏みを繰り返す。不思議な光景である。唱えごとには「火の王どんの踏み鳴らしたるこの村に　悪魔は寄せじ富ぞ入り来る」とある。聖なる仮面「火の王」の力を借りて地を踏み鳴らし、村の災いを追い払うのだ。

このように仮面を額に着けたり、手に持って舞うのはなぜだろう。面はマジカルな力を秘め、時に祟りをもたらすとされるので、顔に着けて人間の息が掛かることを畏れたのではないか。一帯には同じ系統の演目が多数伝わり、面を手に持って悪魔祓いをする作法も時折見られる。

このように正月に聖なる仮面を着けて踏み鎮めの儀式を行うしきたりは、実は江戸時代まで尾張・熱田神宮や伊勢神宮外宮などにも存在し、猿楽がそれを演じていた。しかしいずれの行事も明治時代には絶えてしまった。有名な大神社でも伝え切れなかった中世的な芸能が、遠州おこないでは現在も大切に伝わっているのだ。

聖なる面を頭上に付けて舞う
鉾の舞　「神澤おくない」にて

浜松市内の面（一）
市内の面の調査を開始

浜松市内各地の無形民俗文化財では、さまざまな場面で「仮面」が使用されることがある。田楽やひよんどり・おくないをはじめ、大念仏や花の舞、神楽でも「仮面」をつけた舞手が登場する。また、獅子舞の獅子頭もこれにあたる。歌舞伎の化粧（隈取）も普段とは異なる人物になりきる点では共通するといえるだろう。

また、すでに祭礼は途絶えているものの、仮面が大切に残されている地域の神社などが市内には数多くあることがわかってきた。市内に伝わる面の総数は二百面を優に超えそうだ。

浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会では、自分たちの団体が保持している面をはじめ、市内各地に伝わる面を少しずつ調査して、写真とともにいわれなどを紹介していくことを計画した。以下は令和二年度の調査概要である。

この調査には、各団体のご協力をいただいた。

川名ひよんどりの面

◆狩宿六所神社（北区引佐町）

四面が残されている。現在、面を使用した祭りは伝わっていないが、文化六年（一八〇九）の『正月五日祭礼之事』という古文書があり、まとまった詞章も残されている。近在の川名や懐山と同様の正月行事があったものと思われる。また、ササラという木をすり合わせて鳴らす音具も合わせて拝見した。

六所神社の面とササラ

◆峯熊荒神社（天竜区熊）

ご神体として獅子頭が祀られている。近年塗り直したと聞き及んだ。地元には、次のような伝承がある。祠に入った泥棒がご神体を持ち去ったものの途中で捨てていった。それを横山の者が拾って手許に置いておくと裕福になったので、地元の神社に奉納した。その後、お告げにより峯熊が奪い返し、再び盗まれないように鎖で固定したというのである。実際、峯熊の祠内にはその鎖も残されていた。伝承の本当のところはわからないが、古い面には強い霊力があるという信仰の一例かと思える。

峯熊荒神社の獅子頭と鎖
ご神体として祀られている。

峯熊ではこの面を使用した祭りがどういうものだったか伝わっていない。近在の熊にはかつて神楽があったといわれるし、横山にも明治初期に停止したという祭礼の面と鈴が残されている。

◆宇志八幡宮（北区三ヶ日町）

室町時代の作と伝わる市内でも古い時代の二面が保管されている。「鉢巻悪尉（はちまきあくのじょう）」・「父尉（ちちのじょう）」と呼ばれ、いずれも静岡県指定文化財である。長く門外不出とされ、悪尉の面は、集落の大事な時期には雨乞いに用いられた。昭和十九年まで雨乞いの記録があり、地元では「お面様」と呼んでいる。今回は地元の皆様のご厚意で、神事の後に拝見することができた。

宇志八幡宮については、『遠江国風土記伝』に、「八月十五日能舞、貞享五年（一六八八）停止」とあり、江戸時代初めまでは、大福寺や摩訶耶寺（『風土記伝』では、両寺は正月開催と記載する）と同じように能が行われていたらしい。また、言い伝えでは悪尉の面はもともと県境を越えた中宇利村（現新城市）にあり、同村の人びとが県境にあたる雨生山（うぶさん）でこの面を用いて雨乞いをしたところ大雨となり、流された面が猪鼻湖畔の「面わご」に漂着して宇志に祀られたとされている。中宇利の天神宮（旧雨曳天神社）にも同様の伝承があると紹介されている。父尉は、小面だが、能の翁の面として使用されたのだろう。悪尉は鉢巻をした鬼を表し、赤く塗られていることがわかる。また、後補で両目を金地で塞いであり、その頃からは社殿に飾ることを意図したようだ。

宇利側から見た雨生山
稜線の向こう側が三ヶ日町

宇志八幡宮の父尉（左）と鉢巻悪尉（右）

これらの詳細とこれからの調査経過は、今後の本紙で順次ご紹介する予定です。

寺社や公会堂などに古い面が残されているようでしたらご紹介下さい。

編集・浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会・発行 浜松市　電話〇五三-四五七-二四六六